

児童一人一人に社会性を育み、「よりよい集団」をつくる指導の在り方（第二年次）

— 「協働」を目指す、情動を踏まえた社会的スキルの指導を通して—

長期研究員 徳永 一 夢

《研究の要旨》

学校は、児童にとってのびのびと過ごせる楽しい場でありたい。第二年次となる本研究では、多様な感じ方や考え方もつ他者と「協働」する集団の姿を目指し、担任との連携を図りながら、情動を踏まえた個人の社会的スキルを高めるための指導を積み重ねた。実践を通して、社会的スキルの意味や必要性への心情的理解が深まり、学んだスキルを他者と関わる際に活用し、互いの情動と向き合いながら「協働」する集団の姿が見られた。

I 研究の趣旨

本研究では、教育相談の予防・開発的な機能を活用した実践を積み重ね、個人及び集団としての児童の発達を支援することに取り組んだ。第一年次は、確かな児童理解を基盤として、認め合いに焦点を当てた実践を行った。自己理解・他者理解の深まりを通して、集団の支持的・共感的な雰囲気や個人の承認感の高まりが見られた。そして、図1の社会性が向上し、学級や学年集団の実態に応じた「よりよい集団」への変容が見られた（図2）。

社会性の四つの要素	育成したい社会的スキル
共感性	○相手の気持ちを考えた働きかけ
集団参加能力	○仲間の誘い方 ○仲間への入り方
コミュニケーション能力	○あたたかい言葉かけ ○状況に応じた質問のしかた ○上手な聴き方
アサーティブ*	○優しい頼み方 ○相手に配慮した断り方

* 相手の立場を考えながら、自分を素直に表現する力

図1 社会性のとらえ

○関わり合う	相手を選ばず、進んでコミュニケーションを図る。
○認め合う	自分自身や他者のよさを認め、互いを尊重し合う。
○助け合う	相手の思いを考え、互いのよさを生かして協力し合う。
○高め合う	互いのよさを高め合うとともに、社会や集団の問題に対し合意形成を図り、協働して問題の解決に取り組む。

* 四つの姿に段階はなく、複合的に見られることが理想的であると考ええる。

図2 「よりよい集団」に見られる児童の姿

しかし、「高め合う」姿に課題が残り、調査からも協働に関する児童の意識の低さが明らかになった。また、技能としての社会的スキルの指導に偏り、意味や必要性を実感させるまでには至らず、実践へと結び付けることができなかった。そこで、第二年次は、個人の社会的スキルの育成を通して、「高め合う」集団の姿、特に「協働」する姿を目指した。本研究における「協働」とは、「対話を通して関わり合いながら、集団で決めた目標の達成を目指すこと」ととらえる。目指す姿に迫るため、第一年次の児童の実態を踏まえたより多角的・多面的な実態把握、情動^{*1}を踏まえた段階的な社会的スキルの指導を担任と連携しながら行うことにより、個人と集団を育成する効果的な指導の在り方を検証することとした。

*1 本研究では、情動を「行動に伴う感情」ととらえる。感情と同義であるが、行動との関連を強調するため情動を用いる。

II 研究の概要

1 研究仮説

学級活動及び日常指導において、以下の視点に基づく指導が充実すれば、児童一人一人の社会性が育まれ、「協働」する「よりよい集団」をつくることができるであろう。

【視点1】多角的・多面的な児童の実態把握

【視点2】情動を踏まえた段階的な授業

【視点3】担任との連携による日常指導

2 研究の内容と実際

(1) 研究の内容

研究協力校の第5学年（第一年次からの継続）を対象に、図3の研究構想に基づいて実践を行うこととした。

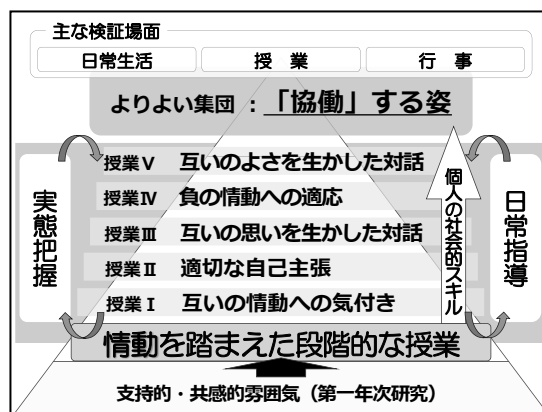


図3 研究構想

(2) 研究の実際

① 【視点1】多角的・多面的な児童の実態把握

児童の実態を多角的・多面的にとらえ、変容を把握するとともに、担任と指導・援助の方向性を共有した。そのため、主に以下の三つの方法で調査を行った。

○児童の観察；社会的スキルと協働の観点から、日常生活、授業、学校行事の様子を観察した。

○社会性調査；社会的スキル8観点に、自己理解、他者理解、協働、情動の4観点を加えた12観点30項目について、4件法で尋ねる質問紙を作成し、実施した。

○Q-U；学級集団の状態をとらえるとともに、主に個人の、協働に関する意識の変容について実態を把握した。

特に、第一年次の実践により個別の指導・援助を要すると感じた児童については、個々の課題を基に重点的に実態把握を進め、個に応じた指導・援助を行った。

事前調査の結果からは、「協働」への意識の不十分さにより、他者との関わりに対して消極的な傾向があるという課題が明らかになった。

② 【視点2】情動を踏まえた段階的な授業

授業における社会的スキルの指導においては、技能としてのスキルの理解を高めるとともに、情動を意識させることで実践につなげることをねらった。また、「協働」に必要な社会的

授業	情動との関連	「協働」と関連した学習内容
I	他者の情動の認識	表情から互いの情動に気付く
II	自他の情動の認識 情動の適切な表出	適切な自己主張の仕方 を考える
III	情動の適切な表出	適切な話の聞き方 を考える 互いの思いを生かして、 対話をする
IV	自己の情動の認識 負の情動への適応	自分の「感じ方」を知る 負の情動への適応方法を知る
V	(実熟化)	互いの情動と向き合い、 よさを生かした対話をする

図4 授業の構想

スキルに焦点化し、段階的に身に付くよう、学級活動の時間を活用した授業を構想した(図4)。本稿では、授業実践Iと授業実践IIを基に、授業の実践について述べる。

ア 授業実践I「表情から互いの情動に気付く」

(7) 本時の概要

第一年次の「認め合い」を踏まえ、互いのよさを「高め合う」ために、他者理解を深めることができるようにしたいと考えた。他者の情動を認識させることで、「相手の気持ちを考えた働きかけ」や「あたたかい言葉かけ」の社会的スキルを高めることをねらった。そこで、表情から他者の情動を読み取る活動を行った。また、情動の変化を実感させるため、ペアで協力して活動するゲームを授業の初めと終わりに行い、児童の行動の変容を見た。

(4) 児童の姿から

一般的に喜び・怒り・悲しみを読み取ることができる3枚の写真を児童に提示した(図5)。

児童は、目や口など顔の細部の様子に着目し、読み取れる情動の根拠とした。児童Aは、初めのゲームにおいて、友達の成功や失敗に対して無関心な態度をとっていた。しかし、終わりのゲームでは、友達の成功と一緒に喜び、積極的に関わる姿が見られた。また、失敗した友達に励ましの声をかける児童の姿も、より多く見られるようになった。情動の変化を感じさせる場を設けたことで、社会的スキルの意味や必要性を、実感を伴って理解することができたといえる。児童Bの、「相手の気持ちを考えて、表情やしぐさなどを見て声をかけると、相手も気持ちが変わることを学んだ」という感想からは、まず相手をよく見ることが他者理解において重要であることに気づき、他者への関心が高まっていることがうかがえる。



図5 使用したワークシート

イ 授業実践II「適切な自己主張の仕方を考える」

(7) 本時の概要

自分の思いを伝えることが苦手であるという学年の児童の実態から、「協働」において必要となる自己主張の仕方を身に付けさせたいと考えた。そこで、自己主張における三つの伝え方(非主張・攻撃的・アサーティブ)を体験的に学ぶことで、児童が日常の自己主張の仕方を見つめ直し、より適切な方法を考えることができるようにした。その際、話し手・聞き手の情動を考え、自他の情動を認識させることで「優しい頼み方」や「相手に配慮した断り方」の社会的スキルを高めることをねらった。

(4) 児童の姿から

学級会で自分の意見を伝える場面における三つの伝え方の例を、ペアでロールプレイをさせた。次に、それぞれの伝え方における話し手・聞き手の情動の変化を考えさせた。児童は、伝え方のよしあしを情動から考えることができた。その後、先約があるが遊びに誘われる場面での、自己主張の仕方を個人で考えさせた。ふだんは、発言に消極的であった児童Cは、自分なりの伝え方を、自信をもって述べ、「相手の気持ちを考えるのも大事だけれど、自分の気持ちを伝えるのも大事だと思った」と振り返った。体験を通して自分の思いを伝える大切さに気付いたことで、学んだ社会的スキルを活用して自分の考えを述べることもできたといえる。また、児童Dの、「聞くときも考えを伝えてくれる人の気持ちを考えられたらいい」という振り返りからは、情動を踏まえた指導により、本時で焦点化した「伝え方」だけでなく「上手な聴き方」の社会的スキルにおいても意識が高まっていることがうかがえる。児童Dの思いを生かし、次時の始めに「三つのきき方(無関心・否定的・傾聴)」として学習活動を考え、取り入れた。

③ 【視点3】担任との連携による日常指導

ア 「ふりかえりカード」へのコメントの活用

教師が児童の思いを受容したり支持したりすることは、児童一人一人の自信や自己有用感を高める上で重要である。そこで、第一年次からの継続した取組として、児童一人一人の「ふりかえりカード」への記述に対して、意図的に、認めるコメントを返した。児童の名前を入れたりIメッセージ^{※2}を用いたりすることを心がけた。実践後の児童への聞き取りでは、「コメントを見るのを楽しみにしていて、励まされた」や「直接言いにくいことも感想になら書ける」という声が聞かれた。

※2 主語を「私(I)」にして相手に伝えること。受け手に素直にメッセージを受け入れやすくすることが期待される。

イ 通信の発行による児童の気付きの共有・発信

定期的に通信を発行し、授業の様子を発信した(図6)。

通信を見た保護者からは、「自分の子どもだけでなく、他の子どもの感想を見ることで、学年や学級の雰囲気を感じられる」や「子どもの生活に生かせるものであり、心を育てることにつながる」という声が聞かれた。

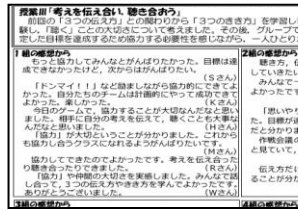


図6 発行した通信の一例

ウ 担任との指導・援助の視点の共有

児童の発達を支援する上で、学級担任が果たす役割の大きさを踏まえ、担任の協力により、授業内容や上記ア・イを生かした取組を、教科指導や生活指導においても連携して行った。授業実践後に、児童が学んだ内容を活用できる具体的な場面を話し合ったり、学校行事を児童の変容をとらえる場として視点を共有したりした。担任からは、「相手の考えを素直に聞いた上で、三つの伝え方を活用し、自分の考えを伝えることを意識して指導した」や「児童が、個人や集団としての活動過程を振り返る際の視点として活用した」という声が聞かれた。

III 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 個人の社会性の育成

社会性調査の結果、四つの要素のうち三つにおいて平均値が向上した(図7)。特に、「相手の気持ちを考えた働きかけ」を表す「共感性」の数値が向上している。また、第一年次における事後調査の結果と比較すると、全ての要素において向上が見られた。情動を踏まえた社会的スキルの指導が、児童の情動に対する意識を高め、社会性の育成において有効であったと考えられる。特に、「アサーティブ」の向上は、担任とともに日常指導において重点的に指導してきたことで、実践化が促されたためと推察される。

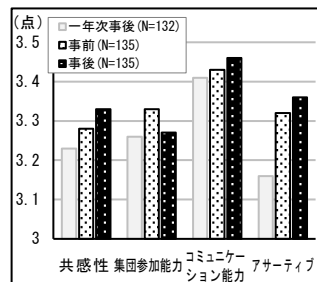


図7 社会性の要素別平均値比較

また、児童Eは、感情のコントロールが難しい児童ととらえ、担任とともに第一年次から個別に支援してきた児童である。実践授業IIでは、ふだんと異なった自己主張の仕方を経験することで、「相手の気持ちを考えられるようになりたい」と、他者の情動への意識の高まりが感じられる気付きを述べた。実践授業IVでは、「自己の情動への適応」をテーマに、自己の感じ方を自覚させたり負の情動への対処法を考えさせたりした。児童Eは、「自分は怒りやすい性格だと感じた」と感想に記した。その思いを担任と共に、共感的に受け止めた。授業が一

つのきっかけとなり、大声を出すなど自制できなくなることが大きく減ったという変容が見られた。担任も、「自己を見つめる機会があったことで、刺激をうまくかわすことができるようになったのではないかと、児童Eの変容を実感していることがうかがえる。情動を踏まえた指導が、児童Eにとって有効であったといえる。

(2) 「協働」する集団への高まり

児童の「協働」に対する意識の変容を見るため、社会性調査とQ-Uから以下の四つの質問の回答を分析した。

社会性調査：個人の集団に対する「かかわり」をみる
 ア 自分だけ考えがちがっても、自分の意見を言っている。
 イ 話し合いをするときに、自分にも友達にもよい解決方法を考えている。
Q-U：個人の集団に対する「とらえ」をみる
 ウ あなたのクラスは、みんななかよく協力し合っていると思いますか。
 エ あなたが何かしようとするとき、クラスの人たちは協力してくれたりおうえんしてくれたりすると思いますか。

数値の変化から、個々の児童の集団に関わろうとする意識が向上したことに加え、「協働」する集団への高まりを児童自身も感じていることがうかがえる(図8)。

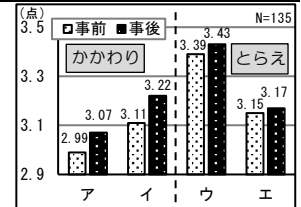


図8 「協働」に関する質問の平均値変化

また、ある学校行事で、グループで解決しなければならない問題があった際、相手の意見を共感的に聴き、よさを認めながらも自分の考えを主張し、集団としての考えをつくり上げる児童の姿が見られた。その中で、意見を言わずに困った表情をしている友達に、さりげなく意見を求める児童もいた。「協働」に必要な社会的スキルを継続して指導してきたことで、児童が「協働」の具体的なイメージを共有し、互いの情動を意識しながら関わり合う集団の姿として現れるようになってきたといえる。

さらに、社会性調査の回答を合計した「社会性合計点」と各観点の事前・事後調査における変化について相関を分析すると、「協働」との強い正の相関が認められた(図9)。

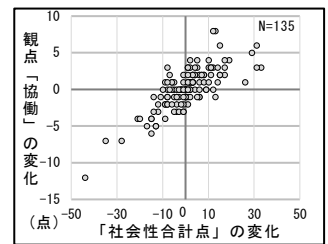


図9 「社会性合計点」の変化と「協働」の変化の相関性

の育成が集団を高め、「協働」する集団へと高めることが個人の社会性の育成につながるといえる。

2 今後の課題

調査に用いた、「今の自分に満足している」という質問に対し、他項目と比べて否定的な回答の割合が高かった。本研究を通して、児童の自己肯定感を高めることに関しては課題が残った。教育活動全体を通じて、他者との関わりの中で自己理解を促す指導の在り方を探りたい。